

書籍紹介

『戦争論』 ロジェ・カイヨワ 著

戦争は合理的な目的のために行なわれるのか、それとも人間社会に潜む衝動が噴き出した結果なのか。20世紀フランスの思想家ロジェ・カイヨワの『戦争論』(1966年・原題: Bellone ou la pente de la guerre)は、戦争を政治や軍事の問題としてではなく、「人間と社会の深層構造」から捉え直そうとする異色の思想書である。ロシアによるウクライナ侵攻、アメリカによるイランやベネズエラへの軍事的介入が続く現代において、本書の洞察は驚くほど今日的である。

戦争は偶発ではなく 選ばれる行為である

ロジェ・カイヨワは『戦争論』で戦争そのものの構造的な理解を試みた。本書は「戦争とは何か」という問いを単なる軍事・政治分析で片づけず、人間の根源的な衝動と社会的意味を掘り下げる。カイヨワにとって戦争とは、単なる国家間の利害衝突ではない。それは文明が長い時間をかけて抑圧してきた暴力性、集団的陶酔、破壊への欲望がある条件下で一気に解放される現象なのである。カイヨワは『戦争論』において、戦争を突発的な異常事態として扱う思考を退ける。戦争は偶然起るのではない。国家が選択し、社会が受け入れ、制度が支えることで成立



米軍攻撃後のイランのイスファハン核施設(2025年6月22日)



ロジェ・カイヨワ

指摘する。

戦争は「行為」ではなく「状態」であり、社会全体を飲み込む異常な日常である。そこでは善悪や是非を超えて、破壊そのものが意味を持ち、人々は集団的熱狂の中で倫理感覚を失っていく。

カイヨワは、文明が暴力を完全に克服したという進歩史観を疑う。むしろ文明とは、暴力を制度化し、抑圧し、外部に追いやる装置にすぎない。そのため、抑え込まれた暴力は、戦争という形で周期的に噴出する。

この視点は、戦争を「例外的な異常事態」として切り離そうとする現代社会の態度に冷水を浴びせる。戦争は外からやってくるのではなく、社会の内部に常に潜在している、それがカイヨワの冷徹な認識である。

戦争は「手段」ではなく「状態」とある

本書で最も印象的なのは、戦争を「目的達成のための手段」として捉える近代的理解への批判である。クラウゼヴィッツ(※)の「戦争は政治の延長である」という見方に対し、カイヨワは、戦争がひとたび始まれば、もはや政治的合理性を逸脱し、独自の論理で拡大していくと

用するのが「民主主義」と「人権」である。

イラク戦争、アフガニスタン侵攻、リビア空爆、そしてベネズエラへの軍事的圧力。そこでは一貫して、アメリカ自身が「正義の執行者」として語られた。しかし結果として残されたのは、破壊された国家、分断された社会、そして数え切れない民間人の死である。

カイヨワの言う「戦争の儀礼性」とは、まさにこの構図を指す。理念は戦争を崇め、高き行為へと変換し、暴力を道徳的義務へとすり替える。その過程で犠牲者は抽象化され、責任は霧散する。

ウクライナ戦争とアメリカの影

ロシアによるウクライナ侵攻をめぐっても、当初は安全保障や地政学的合理性が語られた。しかし戦争が長期化するにつれ、破壊と報復が連鎖し、当初の目的が曖昧になっ

ていく様相が見られる。これはまさに、カイヨワが指摘した「戦争の自律性」である。一度始まった戦争は、もはや誰かが完全に制御できるものではなく、当事者すら飲み込む巨大な力となる。

ウクライナ侵攻が非難されるのは当然である。しかし、そこでアメリカの責任が免責される理由はない。NATO(北大西洋条約機構)の東方拡大、代理戦争としての武器供与、和平よりも「勝利」を優先する言説。これらは戦争の長期化に明確に寄与している。

カイヨワの視点から見れば、アメリカはこの戦争を「道徳的物語」として管理している。善と悪を明確に分け、疑義を差し挟む者を「侵略容認」として排除する。この単純化こそが、戦争を持続させる最も強力な装置である。

戦争は終わらせることよりも、意味づけを維持することの方が容易だ。アメリカはそのことを熟知している。

アメリカという文明

この視点から見ると、アメリカが行なってきた数々の軍事介入は、単なる外交政策ではなく、文明国家が抱える構造的暴力の表出として理解できる。ベネズエラをめぐる軍事的圧力や介入の議論にお

いて、民主主義「人権」「安全保障」といった正義の言葉が前面に出される。しかしカイヨワの視点に立てば、そうした言説の背後に、集団的優越感や支配欲、暴力の正当化が潜んでいるかを問わざるを得ない。



ニューヨークへ運行されるドナルド・トランプ大統領夫妻

ベネズエラに対する長年の制裁、政権転覆の示唆、そして突然の大規模攻撃とドナルド・トランプ大統領の拘束は、その典型である。表向きは「独裁から国民を解放する」ためとされながら、実際には地政学的支配と経済的利害が優先されてきた。

カイヨワの言う「正義の仮面をかぶった暴力」が、ここにはある。

そこに、ロシアとアメリカの決定的な違いはない。異なるのは語彙と演出だけである。戦争は常に「やむを得ないもの」「正しいもの」として語られるが、その語り自体が戦争を可能にする条件なのだ。

メディアと知識人の共犯関係

カイヨワが今日も重要な視点するのは、戦争を支えるのが兵士だけではないことを明らかにしている点だ。戦争は言論によって支えられる。専門家、評論家、メディア。彼らが語る「現実的判断」や「利益」は、しばしば戦争の不可避性を前提としている。アメリカの戦争が正面から批判されにくいのは、それが「国際秩序」という語で包まれているからだ。この秩序が誰のためのものか、誰を犠牲にして成り立っているのかは、ほとんど問われない。

戦争は銃で始まる前に、言葉によって準備される。カイヨワはその危険を、半世紀以上前に見抜いていた。

戦争は遠い異国の出来事ではなく、私たちが属する文明の内部で、理屈を与えられ、支持され、再演される行為なのだ。その認識なしに、決して平和は訪れない。

『戦争論』は悲観的な書物である。カイヨワは、戦争を完全に根絶できるという希望をほとんど提示しない。しかし同時に、本書は読者に鋭い自己反省を促す。理解することによってしか、戦争は止められないという厳しい現実を突きつける。善悪の二元論に逃げることは容易だ。しかしそれは、次の戦争を準備する行為でもある。戦争を生み出すのは「彼ら」ではなく、「私たち」の社会であり、思考であり、欲望なのだ。

ウクライナ戦争とアメリカの軍事行動を同時に見つめるとき、戦争を生み出しているのは誰か、そしてそれを許しているのは誰かと私たちは問われる。

ロジェ・カイヨワの『戦争論』は、即効性のある解決策を与えてはくれない。しかし、戦争を「理解したつもり」になっている私たちの思考を根底から揺さぶる力を持っている。ウクライナ侵攻やアメリカのベネズエラ攻撃、イスラエルによるガザ地区への攻撃など軍事行動が続く今だからこそ、本書は「なぜ戦争は繰り返されるのか」という問いを、再び私たち自身に突きつけてくるのである。

戦争は遠い異国の出来事ではなく、私たちが属する文明の内部で、理屈を与えられ、支持され、再演される行為なのだ。その認識なしに、決して平和は訪れない。

※カール・フォン・クラウゼヴィッツ(1780-1831)。プロイセン王国の軍人・軍事思想家。死後に出版された『戦争論』(1832年・原題: Vom Kriege)は近代における戦争の本質を突いた古典的名著。この中の「戦争は他の手段をもつて政治の延長である」という記述で、戦争を軍事だけでなく、政治・社会・人間心理を含む総合的な現象として理論化した。

カイヨワが今日も重要な視点するのは、戦争を支えるのが兵士だけではないことを明らかにしている点だ。戦争は言論によって支えられる。専門家、評論家、メディア。彼らが語る「現実的判断」や「利益」は、しばしば戦争の不可避性を前提としている。アメリカの戦争が正面から批判されにくいのは、それが「国際秩序」という語で包まれているからだ。この秩序が誰のためのものか、誰を犠牲にして成り立っているのかは、ほとんど問われない。